



左から【前列】久保、西本、大谷、中本、川島、横山【中列】紺谷、三浦、穂積、工藤、西村、奈良【後列】森田、川本、寺内、星、小池、浅井

■地方大会の戦績

- ◇14-0 箕面自由学園 (20安打の猛攻で七回コールド)
- ◇7-0 島上 (八回コールド。久保は12奪三振)
- ◇13-0 阿武野 (三回に大谷の満塁ランニング本塁打などで一挙8点、五回コールド)
- ◇4-1 金光第一 (九回、大谷の二塁打などで加点し逃げ切る)
- ◇11-0 大工大 (先発全員の14安打で五回コールド)
- ◇2-1 桜宮 (延長十一回、紺谷の中前打で勝ち越す)
- ◇4-0 桜塚 (四番・西本が三塁打2本、3打点の活躍)

ドで迎えた九回二死三塁のピンチで投げた、この試合137球目となる最後の一球だ。四番打者の放った打球は左翼に伸びていく。「しまった」。打球は頭上を越えたかのように思われたが、左翼手紺谷が精いっぱい伸ばしたグラブの先に、笑顔で集まるナインをよそに、久保は今まで感じたことのない野球の怖さを感じたという。

しかし、甲子園で投げたこの一球が久保にエースの自覚を持たせた。尾崎監督が練習時に口にする「魂のこもった球を投げろ」という意味を体感した。久保は「一球たりとも力を抜かず、全力で投げ続ける。それが、エースです」と話す。

北大阪大会では、チーム一丸となって戦い抜いた。主将横山はミートするタイミングを覚え、打率が大幅に上がった。四番・西本は長打力が増した。尾崎監督が期待するのは、半年で二十キロ近くの減量を成功させた川島だ。「やわらかい打撃」を買われ、レギュラー入りした川島は、準決勝の桜宮戦の延長戦で勝ち越すきっかけになった二

塁打を打ち、期待にこたえた。今春から男女共学になり女子マネジャーも三人入りした。小学生的ころから甲子園に通っていた津田昭奈さんは「一度負けたらすべてが終わる甲子園にいとむ選手たちの目が大好き」。スコアブックをつける姿はぎこちないが、彼女たちの目標も甲子園でのベンチ入りだ。

伝統のユニホームの胸には「KANSUI」。春に果たせなかったあと一勝を実現させ、全国五十五代表の頂点を目指す。

(大阪社会部・井上道夫)

監督の横顔



尾崎 光宏
一九三九年、高松市生まれ。高校時代は高松商の中堅手として、春二回甲子園に出場、三年時にはベスト8。関大野球部時代は控え選手だったが、指導力を買われ、四年時に監督就任、六四年から同校社会科教諭。府内では在任年数最長監督。今春の選抜大会で準優勝。野球を通じて選手に学んでほしいことは「気迫、団結、連帯」。